

## VI 結語

滝沢ダム建設に関わる一連の発掘調査では、縄文時代早期から後期中葉に至る各時期の土器が出土した。このうち、後期前葉を中心として、その前後の時期の土器群が、個体数や遺構との共伴などの点でもっともまとまっている。

これらの土器を、時期や系統をもとに以下の通りに

### I 称名寺式段階

#### A 称名寺式

A-1: 称名寺Ⅰc式

A-2: 称名寺Ⅱ式

#### B 関沢類型

#### C 加曾利E・曾利系

### II 堀之内1式生成段階

#### A 口唇部文様帯を有する深鉢

#### B 小仙塚類型

#### C その他の沈線文土器

#### D 異系統土器（宮戸Ⅰb式）

### III 堀之内1式中段階

#### A 口唇部文様帯を有する深鉢

#### B 小仙塚類型

#### C 壺形土器

#### D 口唇部文様帯の浅鉢

#### E 異系統土器（二屋敷タイプ）

### IV 堀之内1式新段階

#### A 朝顔形深鉢

#### B 小仙塚類型

## 第II群土器について

IIは、堀之内1式が生成されつつある時期の土器群である。入波沢西遺跡第12号住居跡と、これに隣接する1号遺物包含層出土の復元個体の大半が、この時期に該当するものと思われる。

称名寺式が、その伝統的な文様規制を急速に衰退さ

分類した。

分類記号中、先頭のローマ数字は時間的階梯を反映するが、以下のアルファベット・アラビア数字は器種や文様系統を示すもので、必ずしも時間差を意味するものではない。

分類図は第122図・第123図に掲載した。

### V 堀之内2式古～中段階

#### A 深鉢

#### A-1 朝顔形深鉢

a 多条沈線タイプ

b 三角区画文タイプ

c 北関東的幾何文タイプ

#### A-2 胴部にくびれを持つ深鉢

#### B 下北原式

#### C 信州系浅鉢

#### D 注口土器

### VI 加曾利B1式段階

#### A 深鉢

#### A-1 朝顔形深鉢

a 口端装飾なし

b 口端貼付文

c 三単位円盤状突起

#### A-2 胴部にくびれを持つ深鉢

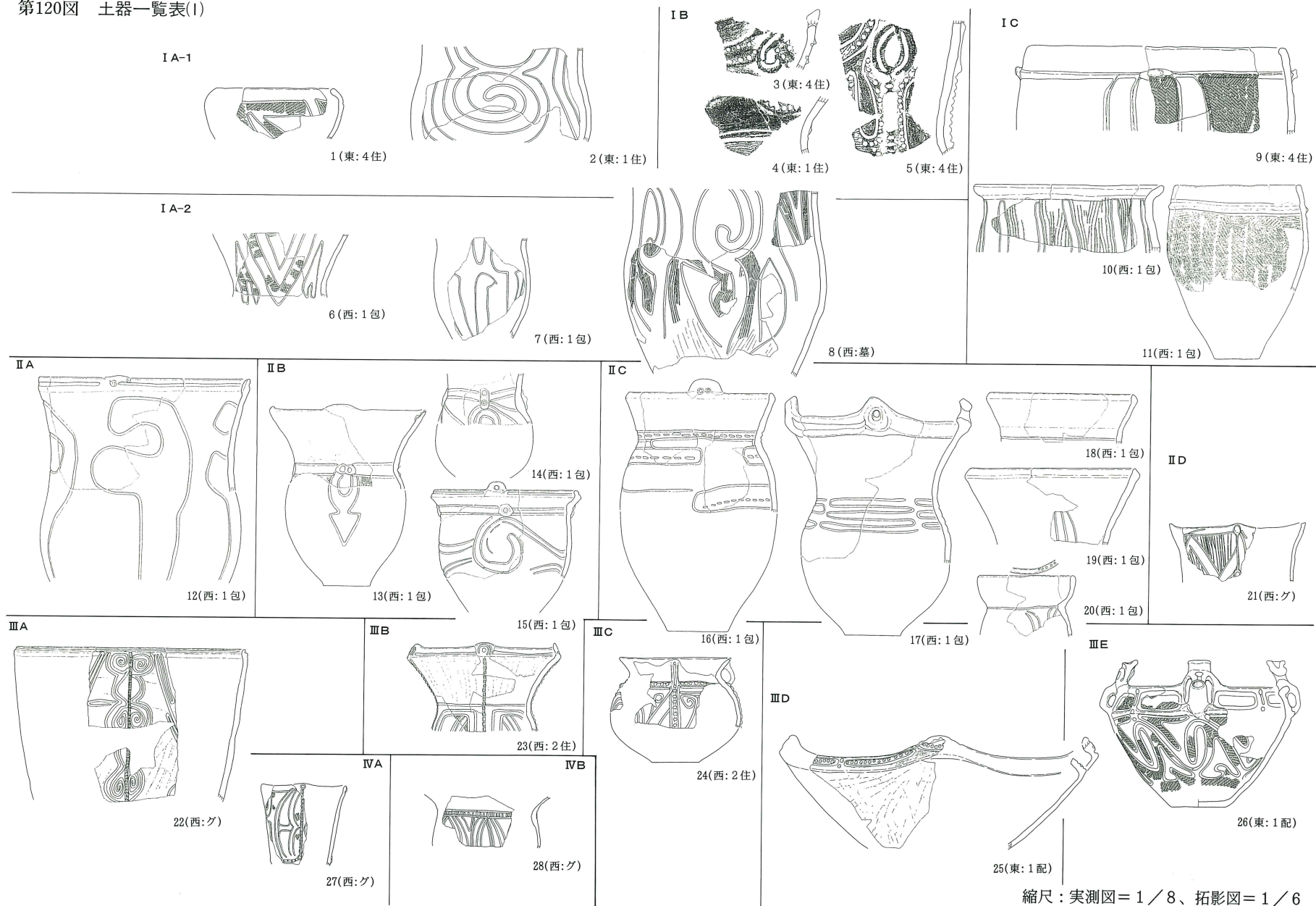
#### A-3 紐線文の深鉢

#### B 浅鉢

#### C 注口土器

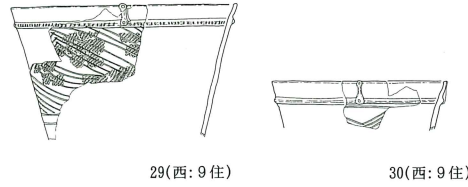
せつつも、個体個体としては厳然として存在する。その一方で、出自を異にするさまざまな系列が、土器組成の中で安定した位置を占め、とりわけ南東北系の綱取Ⅰ式主導のもとに、後期前葉の土器群への変化が促される。

第120図 土器一覽表(1)



第121図 土器一覧表(2)

VA-1a



29(西: 9 住)

30(西: 9 住)

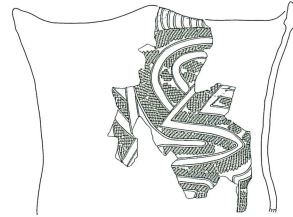
VA-1b



31(西: グ)

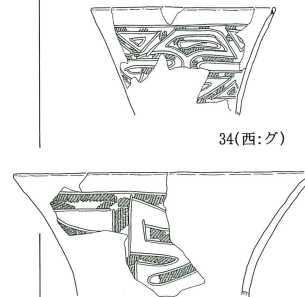
32(東: 5 住)

VA-2



33(西: グ)

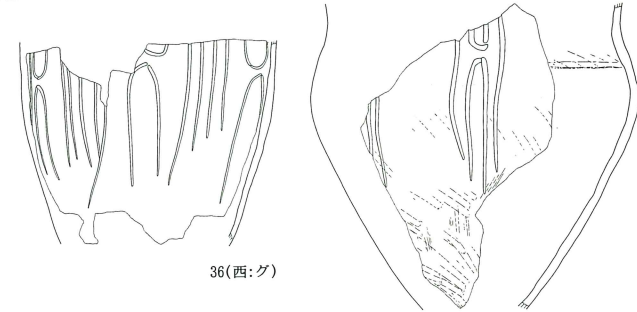
VA-1c



34(西: グ)

35(東: 5 住)

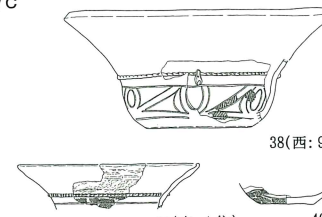
VB



36(西: グ)

37(西: グ)

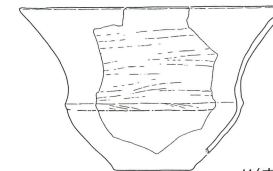
VC



38(西: 9 住)

39(東: 1 住)

40(東: 1 住)

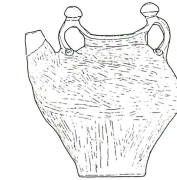


41(東: 5 住)

VD

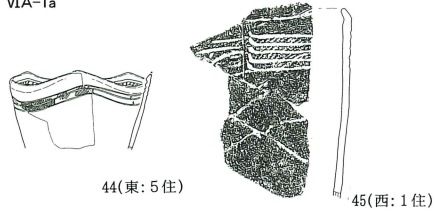


42(西: グ)



43(西: 1 墳)

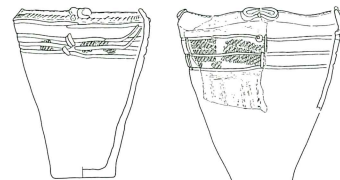
VIA-1a



44(東: 5 住)

45(西: 1 住)

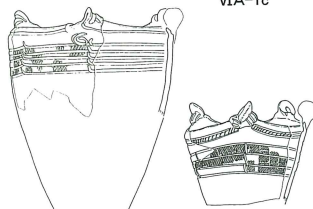
VIA-1b



46(西: 10 住)

47(西: 10 住)

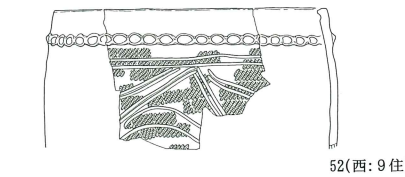
VIA-1c



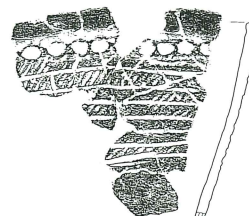
48(西: 1 住)

49(西: グ)

VIA-3

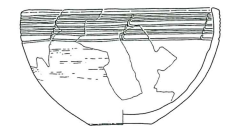


52(西: 9 住)

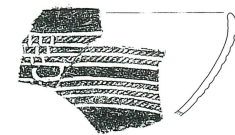


53(西: 1 住)

VIB

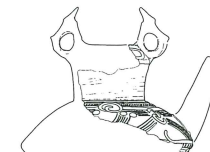


55(東: 5 住)

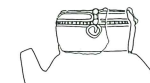


56(西: 1 住)

VIC



57(西: グ)



58(西: 1 住)

縮尺: 実測図 = 1/8、拓影図 = 1/6



称名寺式と堀之内1式の境界については、近年、新屋雅明氏・金子直行氏・鈴木徳雄氏によって資料の検討がなされているが、上記のような構図の中で、堀之内1式の出現をどこに置くかが問題とされている。

金子氏は、系列横断的な単位文化の流れをひとつの画期として想定し、従来称名寺II式の後半とされた部分（鈴木氏の称名寺式7段階）をもって堀之内1式の成立と判断した。

鈴木氏は、土器組成中に称名寺II式が安定して存在し、一方で堀之内1式を構成する土器群（堀之内シンポジウムの時点におけるA群甲1類か）はいまだ出揃ってはいないとして、あらためて該期を称名寺式最終末とする立場を示した。

さて、入波沢西遺跡1号遺物包含層からは、縄文前期～後期中葉に至る各時期の土器が出土しているが、器形復元可能な大型破片に限定すると、そこに一定の時間的なまとまりが想定される。

称名寺系の個体は、列点施文のいわゆる称名寺II式が、破片レベルでもほとんど存在しないが、深谷市明戸東28号住、寄居町北塚屋SK107土壌他との比較から、IA-2とした土器群がこれを補完する可能性が高く、6・7の個体の共伴がこれを裏付けている。

なお、ほぼ同時期とみられる小鹿野町合角中組遺跡、吉田町塚越向山遺跡では称名寺II式が主体である。西に山中地溝帯を控え、複数の峠で信州・上州の国々と連繫されている吉田川の谷筋と、南北が閉塞され基本的に一方通行の荒川源流域で、この時期、情報の流通方向の違いからこうした系統偏差が生じたものと考えられるべきだろうか。

IIAは狭義の下北原式へと連なる土器であろう。

12は、口唇部を全周する沈線が、出土土器中では比較的新しい印象を与えるが、こうした沈線全周のタイプは個体としては早くから存在する。

胴部文様は単位文構成をとるが、下北原式の称名寺系文様からは逸脱している。末端の閉塞するC字状のモチーフはアルファベット文を思わせるが、この系列の特徴として描線の下端は開放するのではないだろう

か。

II Bは鈴木徳雄氏の小仙塚類型である。胴部中段に区画帯を持ち、8の字状の貼付文が付される。二本沈線でJ字連繋文が描かれるのは、この類型に常套的な手法である。13は磨り消し縄文で、唯一綱取I式との関連がうかがわれる土器である。

Cには様々な器形と文様系列の土器が含まれるが、16・17の蛇行文が目を引く。

綱取系の土器にみられる蛇行懸垂文は連鎖状浮線文からの転化とされるが、本類にみられる蛇行文は、下端が開放しない点、モチーフの幅が広く、左右が接して器面を隙間無く埋める点が異なっており、その出自は別に求める必要があるだろう。

北陸の串田新式～前田式の口縁部文様帯にはワンポイント的な蛇行文が用いられ、なかにはかなり振れ幅の大きいものも存在する。ただし、彼我の編年観のすり合わせがほとんど手付かずの状態であるため、本類との連鎖が検証できない。

仙台湾の方形区画文土器中には、綱取式的な小刻みの蛇行懸垂文以外に、パネル状の区画内部に大柄の蛇行文を描くものが存在し（第122図：六反田遺跡3・4例）、さらに、区画を喪失して、蛇行文だけが器面を埋めるものもみられる。見た目の印象では、この蛇行文が本類のものに最も近い。

仙台湾の蛇行文は、大木10式のクランク状磨り消し文が、方形区画文への遷移の過程で形骸化したものと考えられる。時期も綱取I式期にほぼ限定しうるものとみられ、時間的な連続性にも問題はなさそうだ。

幅広の蛇行文がこの種の口縁内屈する深鉢胴部に施文される例としては、長野県上田市の八幡裏遺跡11号住、横浜市帷子峯遺跡54号土壌の出土遺物が挙げられるが、いずれも入波沢西例より時期が下るものと思われる。

また、22の三本沈線の描出法にこうした蛇行文からの連続を見ることも可能だろう。

IIDは、仙台湾から岩手県南部に分布する宮戸I b式に類似の土器である。平行沈線により倒卵状の磨り

消し文様が描かれる。かの地では撚糸文地文が一般的だが、21の個体は竹管条線を地文としている。波状口縁から垂下する隆帯の上下に、中央をくぼませたスプーン状の張り付け文がみられるが、これは同時期の土偶の掌の表現に酷似する。

今回、宮戸Ⅰb式を門前式直後の土器群と考えてこの位置に置いたが、実際には若干の時間幅があるかもしれない。

最後に本群土器の時期であるが、綱取系の土器を含まないため、その位置づけは微妙である。

とりあえず堀之内Ⅰ式生成期と呼んだが、包含層出土の土器を軸に組み立てているため、個別の土器にはⅠ段階下るものも含まれるかも知れず、後続のⅢ群とのブランクを埋める意味でも、若干の時間幅を想定す

## V 群土器について

縄文時代後期前葉、堀之内Ⅱ式に当たる土器群である。量は少ないが、遺構単位での資料が得られた。

VA-1は朝顔形深鉢である。文様系列（時間系列ではない）により3類型に分類した。

Ⅰa類は集合沈線文の伝統を残す土器である。30はこのタイプであろう。29は集合沈線文のみによって三角形区画を描出するもので、群馬県松井田町行田梅木平遺跡表採資料中に類例を見ることができる。堀之内Ⅱ式中段階以降、Ⅰb類の区画文内部を重圈文的に充填する手法が一般化するが、第9号住居跡例はこれに先行するものであろう。

Ⅰb類は三角形区画文の土器である。32は口縁下に紐線文が巡り、胴部文様帯との間が1条の沈線で区画される。31は口縁下に紐線文が巡らず、無文地に8の字状貼付文だけが付される。

Ⅰc類はより複雑な幾何文を描くもので、大きく分けて二通りの系統が存在する。

34は三角形区画間に楕円や入り組み状のモチーフが組み合わせられ、空隙に充填文が挿入されて煩雑な構成をとる。

南西関東における類例が早くから注目されており、

るのが無難であるかもしれない。ここで取り上げたような沈線文主体の土器群にあっては、破片レベルで両者を区別するのは至難である。

なお、沈線主体である点は広義の下北原式に似るが、土器の顔ぶれはあきらかに異なっており、文化の接触地域としての個性（矛盾するようだが）がうかがわれる。

なお、第1遺物包含層からはⅠc類のうち11の粗製土器が出土している。胴張りで、口縁下に無文帯を持ち、胴部との境にたが状の隆帯を巡らす土器で、あきらかに福島～栃木に分布する牛蛭式につらなるものである。口縁下に突出する舌状の突起が失われている点が新しい要素とみとめられよう。

長野県御代田町滝沢遺跡にまとまった資料が多く見られるが、千曲川水系の同時期の遺跡に類例を見出しがたく、分布の中心はむしろ群馬県側であろう。

南三十稲葉式との接触域に生じる一群であり、上越国境を中心に分布し、新潟県下に客体的に存在する堀之内Ⅱ式の破片資料には、必ずといっていいほどこのタイプの幾何文がともなっている。

35は横方向のJ字文・紡錘文を描くもので、堀之内Ⅱ式の上下を区画された胴部文様帯に、称名寺系J字文を閉じ込めたものである。

横浜市川和向原遺跡や、東京都日暮里延命院貝塚にみられるJ字連繫文の土器に近いが、縦位の区画帯が横方向の流れを遮断し、横倒しの特異な単位文を生成している。

いずれにせよ、下北原式分布圏における堀之内Ⅱ式段階の土器であることは確かであろう。胴部から口縁への強烈な張り出しも、これを裏付けている。

VA-2は胴部中段にくびれを持つ深鉢である。胴下半部に屈曲を持ち、口縁は軽微に内屈している。

南三十稲葉式の流れを引く器形であることは一目瞭然であり、口縁の集合沈線、波状口縁の波頂部から垂